



第1分科会



I 学校経営／経営ビジョン

創意と活力に満ちた
学校経営ビジョンの策定と推進

経営ビジョン



町探検（道の駅 恐竜渓谷かつやま）

1 研究課題

創意と活力に満ちた学校経営ビジョンの策定と推進

2 趣旨

今日の知識基盤社会は、グローバル化・情報化が進展するとともに、少子高齢化、人間関係の希薄化、家庭や地域の教育力の低下など、変化の激しい予測困難な社会となっている。あらゆる分野で社会が大きく変化する中、持続可能な社会を実現していくために、学校に寄せられる期待も一段と大きくなり、多様化してきている。

これからの学校には、混沌とした社会情勢にあっても、子どもたちが志をもって、可能性に挑戦し、よりよい社会を創り出していくことができるよう、必要な資質・能力をしっかりと育てていくことが求められている。

そのために校長は、子どもたちに求められる資質・能力について、学校と家庭・地域が相互に理解しながら学校教育を推進できるようにする必要がある。創意を生かし将来を見据えた明確な学校経営ビジョンを示すとともに、活力に満ちた学校運営を行い、学校改善に向けて絶えず検証し一層の充実を図っていかなければならない。

学校現場において、校長はまず自校の状況を的確に把握することが大切である。そして、課題解決に向けて方向性を示し、重点化と効率化を図りながら、教職員の知恵と力を結集させ、学校組織を運営していくリーダーシップの発揮が求められている。

本分科会では、校長が力強くリーダーシップを発揮しながら学校経営を行っていくために、将来を見据えた魅力あるビジョンに基づく学校経営の創造について、具体的方策と成果を明らかにする。

3 研究の視点

(1) 未来を見据えた魅力ある学校経営ビジョンの策定

校長には、社会の変化や教育改革の考え方を踏まえた、具体的で先見性のある魅力的な学校経営ビジョンを明確に示すことが求められている。

そのため、学校の責任者である校長は、子どもたちの未来を見据えた中・長期的な視点に立ち、学びに向かう力・人間力や人間関係形成力など、「自主と協働」の力を育み、教職員、保護者、地域住民が共通理解して連携・協働していくためのビジョンを示さなければならない。

このような視点に立ち、未来を見据えた魅力ある学校経営ビジョンを策定していく上での校長の果たすべき役割と指導性を明らかにする。

(2) 学校経営ビジョンに基づく創意と活力に満ちた学校経営の推進

校長は、学校教育目標の具現化、創意ある教育課程の編成、教職員の学校運営参画意識の醸成などの様々な視点から、新しい時代にふさわしい学校としての自主性、自立性を確立し、創意と活力に満ちた学校経営を推進していかなければならない。

また、夢や希望を実現し人間性豊かな未来社会を生き抜く子どもの姿を見据え、教職員が自信と意欲をもって教育実践を推進できるように、総合的な策を講じていく必要もある。

このような視点に立ち、学校経営ビジョンに基づく創意と活力に満ちた学校経営を推進していく上での校長の果たすべき役割と指導性を明らかにする。



第1分科会

研究の視点 未来を見据えた魅力ある学校経営ビジョンの策定

研究発表題 **未来を見据えた魅力ある学校経営ビジョンを策定していくための校長の在り方**

三重県多気郡明和町立齋宮小学校長 佐野 稔

I 研究の趣旨

学校経営ビジョンは、校長の意思であり、学校内外に示す公約である。そのために、学校がどのように教育活動を展開し、どのような児童を育てていくのかなどについて、教職員一人一人に明確に示しながら学校経営への参画の意識を高めていくことが大切である。また、保護者や地域の声に耳を傾け具体的に実効性のある解決方法を示していくことも求められている。

そこで、将来を見据えた魅力ある学校教育ビジョンを策定していくための重要なポイントは何か、また、その具現化のために校長が果たすべき役割とリーダーシップの在り方とは何かについて述べていきたい。

II 研究の概要

1 アンケート調査による実態把握と分析

平成元年に、アンケート形式により郡内15の小学校の学校長に、それぞれの学校の学校経営計画の内容や取り組み状況について、現状を調査した。

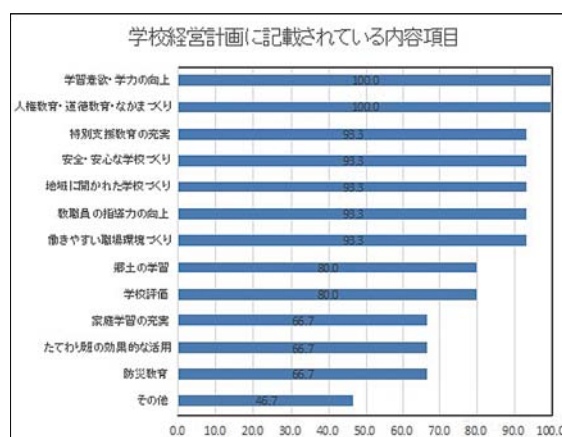
調査した項目は、以下の3点である。

- (1) 学校経営計画に記載されている内容
- (2) 本年度、重点的に取り組んでいる内容
- (3) 実現していくための障害や課題

この3項目について、調査結果の分析を行った。

(1) 学校経営計画に記載されている内容について

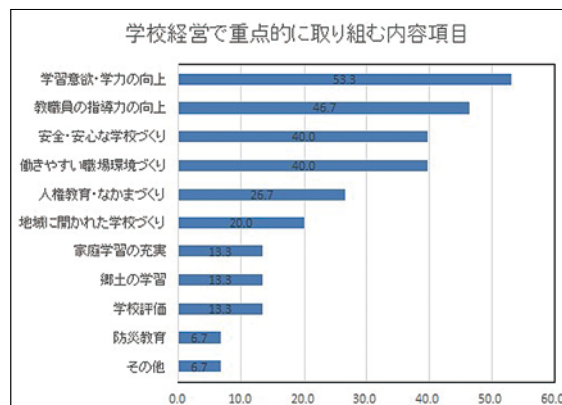
「学習意欲・学力の向上」「人権教育・道徳教育・なかまづくり」「特別支援教育の充実」「安全・安心な学校づくり」「地域に開かれた学校づくり」「教職員の指導力の向上」「働きやすい



職場環境づくり」については、ほとんどの学校で、学校経営計画の中に記載されていた。次いで、「郷土の学習」「学校評価」について記載された学校が多かった。

「防災教育」については、明和町や多気町の学校が多かった。また、「その他」については、「生徒指導」についての記述が多く、大台町では、「ユネスコスクール」や「環境教育」について記載された学校が多かった。

(2) 学校経営計画の中で重点的に取り組む内容について



重点的に取り組む内容の上位3つは、「学習

意欲・学力の向上 (53%)」「教職員の指導力の向上 (47%)」「安全・安心な学校づくり (40%)」「働きやすい職場環境づくり (40%)」であった。「学習意欲・学力の向上」「教職員の指導力の向上」が上位にきているのは、新学習指導要領による教育課程に移行し、目指す児童像が変わってきているためと思われる。また、全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックなどの結果をそれぞれの学校で分析し、児童につけさせたい学力とは何かを考えて取り組みを進めているからだと考えられる。

「安全・安心な学校づくり」については、児童が事故や災害にあわず、困り感のある児童も安心して過ごせる学校づくりを目指しているからだと思われる。

「働きやすい職場環境づくり」については、教職員の働き方改革が叫ばれる中、教職員の健康を考え、ワークライフバランスを考えて生き生きと教育活動に打ち込めるようにそれぞれの学校で取り組んでいるからだと思われる。

次に、郡内の小学校長が重点的に取り組んでいる活動の一部を紹介する。

ア 「学習意欲・学力の向上」「家庭学習の充実」

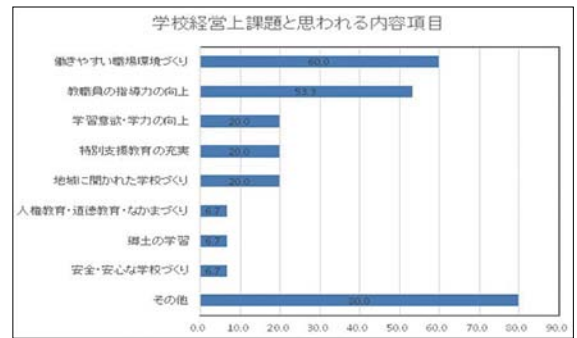
に向けて取り組んでいること

- 日常的な授業観察と事後指導。授業へのアドバイス。
- 学力検査 (学調・QU など) の分析。
- 校内研修の充実。
- 家庭学習の手引きの改善。
- 公開研究会等の情報提供。
- 自己研修の推奨。

イ 「教職員の指導力の向上」に向けて取り組んでいること

- 学校が目指すところを分かりやすく教職員に提示、共有。
- 教室訪問。
- 講師を招聘した研修会の実施。
- 個別面談や実践振り返りアンケートの実施。
- ミドルリーダーの意識向上。
- スキルアップ研修の実施。
- 指導教諭 (研修担当) との連携。
- 温かい雰囲気にもまれた職員集団づくり。

(3) 学校経営をする中で見えてきた課題について



「働きやすい職場環境づくり (60%)」と「教職員の指導力の向上 (53%)」が半数以上を占めた。また、学校によって様々な課題が存在していることが分かった。

勤務時間の縮減については、やるべきことが以前より増え、意欲的に真面目に取り組む教職員ほど時間外勤務が増えているという意見もあった。教職員がしなければならない仕事と本来しなくてもよい仕事をはっきりさせて、それを保護者や地域の方々に納得してもらえるように伝えていくことが必要なのだろう。また、教職員自身の意識改革も必要なのかもしれない。

「教職員の指導力の向上」については、若い教職員が増えている学校もあり、生活指導や保護者対応、子どもとの向き合い方など経験豊かな教職員が持っているノウハウを引き継いでいくことが課題となっている。また、逆に年配のベテラン教員が多い学校では、学力観や授業の仕方が固定化しており、意識改革や授業改革を促すことが難しいようである。学校全体としての方向付けと個々の良さを生かした指導のバランスを考えた学校経営を進めていく必要があるようである。

その他の課題の中には、「目指すビジョンを共通理解してほしいと考えて、テーマ的に提示したが、なかなか教職員に浸透しなかった」という意見もあり、校長が、いかに分かりやすく学校経営方針を示し、共通理解を図って、協働して取り組む学校体制を整えていくことが、一番の課題であると思われる。

(4) 調査を通して見えてきたこと

「働きやすい職場環境づくり」と「教職員の指導力の向上」については、5割近くの校長が



重点的に取り組んでいるのにもかかわらず、5割近くの校長が課題として挙げている。一方、「学習意欲・学力の向上」については、5割弱の校長が重点的に取り組んだこともあり、課題として挙げているのは2割近くの校長にとどまっている。

この差を考えてみると、「学習意欲・学力の向上」については、新学習指導要領の導入による全体研修や校内研修などで学ぶ機会が多く、とりわけ校内研修では、それぞれの学校で研究テーマを決め、授業研究などを通して全教員が共通理解を図りながら指導してきた成果が、客観的な数字となって表れてきているからではないかと思われる。

一方、「教職員の指導力の向上」については、一斉研修等で学ぶ機会も増えてきてはいるが、個々の教師の意欲や経験、取り組み方に頼ることが多く、周囲からの助言や指導をいかに自分の技量として高めたかを客観的に数値で評価することが難しいからであろう。

また、「働きやすい職場環境づくり」については、人を育てるといふ教師の営みに際限はなく、やればやるほど仕事が増えるといったジレンマに陥っているのが現実である。限られた時間の中で、今やるべきこと何か、何に重きをおいて指導していくのかなど、仕事の段取りを考えて計画的に仕事を進めていく力をつけさせていかなければならない。

2 実践事例～斎宮小学校の取組～

(1) 学校経営計画の概要

ア めざす子ども像

(学校教育目標／わかたけ教育)

- わーわがふるさとを愛する子
- かー輝く夢をもつ子
- たー確かな学力 自ら学ぶ子
- けー元気いっぱい仲間と育つ子

イ めざす学校像

- ・子どもが毎日行きたくなる楽しい学校
- ・保護者の満足度と信頼度の高い学校

ウ 学校経営計画の内容

- ・郷土を愛する子どもの育成
- ・主体的に学習する子どもの育成

- ・人権を尊重する子どもの育成
- ・自らの健康を推進する子どもの育成
- ・地域に開かれた学校づくり
- ・安全で安心な学校づくり
- ・教職員の管理育成

地域・保護者へは、学校便りやグランドデザインを配布したり、お話ができる場面でその概要を伝えたりしている。



(2) 重点的に取り組んでいる内容

ア 郷土を愛する子どもの育成

(ア) 斎宮地区にかかわる体験的な学び

斎宮小学校では、生活科・総合的な学習の時間の年間計画に、「郷土学習」や「ひととの出会い学習」を位置付けている。たとえば、2年生と6年生では斎宮歴史博物館・いつきのみや歴史体験館での聴き取り・体験学習、5年生での祓川水質調査など実施している。斎宮地区の歴史や自然、文化を生かした体験的な学びにより、「斎宮をいつまでも愛する子ども」の育成を系統的に進めている。

(イ) 地域講師や地域ボランティアの活用

毎週火曜日の朝に、約10人の地域ボランティアによる「朝読」を、主に低学年で実施している。この「朝読」により子どもたちの心が落ち着き、学習にスムーズに入っていくことができている。また、参宮街道は朝の交通量が多く、また通学班も多いことから、地域ボランティアによる登下校の交通見守りをお願いしている。

また、「地区（施設）探検」「大豆づくり」

などでは、地域講師による指導をお願いし、地域の教育力を子どもたちの学びに生かした取り組みを進めている。

イ 主体的に学習する子どもの育成

(7) 授業改善のための計画的な校内研修

研究主題「主体的に学び、自分の考えを表現できる子どもの育成～相手を意識した伝え合う活動を通して～」の下、『主体的・対話的で深い学び』を実現するための研修を効果的・計画的に実施している。また、教職員一人一人が教育実践研修を重ねることで授業改善を図るとともに、きめ細やかな学習指導を進めることで、子どもたちに満足感や充実感を与える授業づくりに努めている。また、町指導主事招聘による授業研究、学力向上アドバイザーによる授業参観を通じた教職員への個別指導を実施している。そのことにより、教職員の指導力向上を図っている。

(イ) 確かな学力と主体的な学び

IRTや日々の学習評価により子どもにつけた力を分析し、QUによる学級集団づくりともリンクさせ、個に応じた学習支援を丁寧に行っている。具体的には、漢字・計算の繰り返し学習や補充学習により基礎学力の定着を図ったり、5年生での習熟度別学習を実施したりしている。さらに、学習した成果を発表しあう全校集会、異年齢集団で行う縦割り班活動などを通じた総合的な学びを重ね合わせている。そして、どの学習活動でも「めあて」と「ふりかえり」を大切にすることで、自分自身の確かな歩みを実感させるようきめ細かな取り組みを進めている。

(3) 見えてきた課題

ア 個に応じた指導の難しさ

特別支援学級に在籍する子どもに対して、個別の教育支援計画・指導計画を作成し、丁寧に支援を積み重ねている。さらに、個々への合理的配慮を全職員で理解し継続していくためにも、定期的に現状を把握したり今後の取組を共有したりしている。また、普通学級に在籍しているが、個に応じた学習・生活指導が継続的に必要な子どもについても、同様に全職員

の共通理解を図る場を設定したり、日常的に全職員が意識して対応できる職員室環境を整えたりしている。

イ 「人と関わる力」「自分の思いや考えを伝えたり他者の考えを聴いたりする力」の育成

自ら課題を見つけたり課題を解決したりする力が不足していたり、自分の思いや考えを伝える力や他者の意見を聞く力が充分身についていない子どもがいる。また、語彙が乏しく表現力や読解力が弱く、学習に対して受け身である子どもがいる。また、人間関係がうまく築けず、悩みを抱える子どもが多くいる。また、友だちの輪に入っていけなかったり、些細なことでトラブルになったりする等、「人と関わる力」の弱い子どもがいる。

自尊感情を高めるために、「小さな成功体験の積み重ね」と「認められたという成就感」を大切に学習活動が必要である。さらに、「自分を大切にし友だち（ひと）も大切にする」取組とともに、「もっと聴きたい、もっと話したい」集団づくりをスモールステップで刻んでいく必要があると考えている。

III まとめ

研究を終えて以下のことが明らかになった。

- (1) 学校経営計画は、前年度の学校評価や学校運営の課題を基に、教育界のおかれている現状や地域の人材、環境、職員構成などを考慮して作成していかなければならない。
- (2) 学校経営計画は、教職員、保護者、学校評議員、地域の方々に分かりやすく説明して校長の思いを伝えていく。特に、職員については、作成した校長の思いや願いをしっかりと伝えて、目指す子ども像の実現を目指して教育活動に取り組めるようにしていくことが大事である。
- (3) 学校経営計画を実現するためには、日頃から職員や保護者、地域の方々と気軽に話ができる関係を構築しておく必要がある。
- (4) 学校経営計画に記載してある内容をすべて同じように進めていくのは難しい。重点的に取り組む内容を決め、校長のリーダーシップのもと全教職員で進めていかなければならない。



第1分科会

研究の視点 学校経営ビジョンに基づく創意と活力に満ちた学校経営の推進

研究発表題 **持続発展教育（ESD）を共通課題として、
地域とともに進める学校経営**

福井県勝山市立荒土小学校長 道関 直哉

I 研究の趣旨

創意と活力に満ちた学校経営を行うためには、地域や児童の実態を踏まえ、将来の社会情勢を展望して作成した学校教育目標の趣旨が全教職員に共有され、校長の明確な学校経営ビジョンのもと、創意ある教育課程の中で具現化されることが重要である。

勝山市では、人口減少と少子高齢化が進む地域の実態に鑑み、持続可能な社会を創る人材の育成が重要であると考え、将来の地域を創る児童・生徒を育成するために、平成26年より市内全ての小中学校がユネスコスクールに加盟し、環境保全とふるさと教育を核とした持続発展教育（ESD）を推進してきた。

本稿では、持続発展教育を各校の学校経営ビジョンに掲げ、地域と連携して独自の実践に取り組んできたことが、創意と活力ある学校運営に結び付いたのかを検証する。

II 研究の概要

1 地域が直面する課題と豊富な地域教材

勝山市は人口23,000人弱の小さな町で三つの中学校区にそれぞれ三つの小学校が設置されている。人口減少とそれに伴う少子高齢化は地域が抱える大きな課題の一つであり、2015年から2045年までに総人口は35.4%減少し、約15,600人となる見込みである。このときの市民の平均年齢は、2015年の50.8歳から5.1歳上昇し、55.9歳となる。

この課題の解決に向け、市は早くから観光産業による地域振興策を進めてきた。このため市内には年間90万人が訪れる福井県立恐竜博物館が立地する他、2009年には市全域が「恐竜溪谷ふくい勝山ジオパーク」に認定されるなど、地域教材となる素材

が豊富である。

また、市民自らが、まちの魅力を発見し、それを磨いてアピールしていくエコミュージアムによるまちづくりも活発で、これまで地域に埋もれていた歴史や自然、産業遺産や伝統文化を地域住民が掘り起こす活動に、ふるさと教育の一環として学校が参画する機会も多い。

2 校長の役割

(1) 学校の情報発信力を高める

勝山市の持続発展教育は地域と密接な連携の中で進められてきたが、活動の輪を広げ地域全体の取組にしていくには、学校の活動を発信し理解と協力を求めることが欠かせない。

勝山市においては、ユネスコスクール加盟時から各校共通のブログフォーマットを採用し、主に校長が中心となって情報発信に努めてきた。

市内の学校の中には、新聞社との連携を密にし、さらに積極的な情報発信を目指して毎年、年間40回程度にわたって自校の実践に関連する記事を地方紙に掲載してきた実績をもつ校長もあり、今年度からの校長会の大きな取組の一つとして、各校の実践を積極的に新聞社などに情報発信することとした。

ア 福井県NIE教育研究会への位置付け

学校と新聞社がよりスムーズに連携できるよう、学校の積極的な情報発信をNIE（新聞を活用した教育）実践の一環ととらえ、今年度の実践校選定を契機に、勝山市内全ての小中学校が福井県NIE教育研究会に実践推進校として加盟した。福井県NIE教育研究会は従来7ブロックから実践校を選出し県内の実践を推進しているが、一つの自治体全ての学校が加盟す

ることは今回が初めてとなる。県教育委員会は本年度より5ヵ年を見越した教育振興基本計画を改定したが、各種方針を具現化するための施策に「NIE 教育研究科と連携した新聞活用教育」を7回再掲しており、県の教育施策を先取りする形となっている。

記事には地域行事に児童が参加した事実だけでなく、課題解決に向けて児童が考えた提案やアイデアを掲載するよう依頼していく。

イ 情報発信の方法と成果を共有

勝山市小中学校報道資料	
報道機関各位	令和元年 月 日 勝山市立〇〇〇学校 校長 〇〇 〇〇
(タイトル) 〇〇を開催します (分かりやすく魅力あるネーミングで)	県内初とか、 勝山市初は有効!
1 (概要) 何をするのかをズバリ 勝山市立〇〇〇学校は、〇〇を育てる教育を推進しています。この一環として、 〇〇事業に本校児童が取り組みます。	活動の目的と 背景を強調して!
2 (活動の魅力) 活動の内容の何が魅力なのかを分かるように記載 ※参考 この活動は原木の植樹から、原木の窯入れ、炭窯出しなど一連の作業 を体験することにより、山林の機能や有効活用の重要性を学び、ふるさとを愛す る心を育てるものです。 つきましては下記のとおり、〇〇活動を実施しますので、ご紹介いただきますよ うお願いいたします。	活動の目的と 背景を強調して!
取り上げられやすい実践例 ・地域に貢献する活動 (社会性) ・新聞を使った授業や実践 (NIE) ・これまでない独自の教育活動 (独自性) ~から5年とか、~10年の節目 ・長年継続している活動 (継続性) 年間企画なら、切っぴなイベント、成果発表、~が完成した、等 ・現在の社会的な話題に関連した活動 (話題性) ・表彰等を受けた活動 (客観性) ・将来を見据えた活動 (先見性) などの要素が入っている	
記	
1 日時 令和〇年〇月〇日 (〇) 〇〇:〇〇~〇〇:〇〇 できれば活動や行事の時間スケジュールも添付! 時間がないとき、〇時に行けば、写真が撮影できるかな、とか判断するため、 撮影したいポイントは行事のメーン、子どもが大好きなときです。	
2 場所 勝山市立〇〇〇学校 〇〇 分かりにくいところは地図を添付	
3 参加 〇〇〇学校 〇年生 〇〇名	
4 講師 〇〇 〇〇 (〇〇会)	
5 今後の予定 〇 〇〇会 令和元年〇月〇〇日 (〇) 〇〇:〇〇~ 場所 〇〇 内容 〇〇	
	担当者: 〇〇 〇〇 (教頭) 電話: 0779-〇〇-〇〇〇〇 メール: 〇〇〇〇@edu.city.katsuyama.fukui.jp ブログ: http://〇〇〇〇.milelog.jp/

情報発信にあたっては、各校が簡単に報道資料を作成できるよう共通のフォーマットを作成し、発表の手順を共有した。フォーマットの中に、学校からのメッセージを明確に伝えることが重要であることや、記事となり得るポイントなどを明示した。これは地域の新聞支局とも連携して作成したものであり、今後の各校の活用を期待したい。

また、他校の記事を参考にしたり、学校間での連携を図ったりすることができるように、掲載された記事はスキャンし、市内教職員のみが閲覧できるネットワーク上にアップし共有している。

(2) ESD 指導者を支援する

ふるさと教育や環境教育では、地域がもつ素材は別々であり、新任の教員にとっては取組が難しい。

教職員の中で最も地域と連携する機会が多いのは校長である。このため地域がもつ素材に関する情報収集は、校長によるところが大きい。これまでの取組の中で各校がテーマとする地域素材が明確になってはきたが、これらを活用して新たな工夫を加える段階では、担当者への校長の助言は重要となっている。

予算獲得も大きな役割である。勝山市はESDを推進するため、地域のエコミュージアム活動のための費用を助成しており、小中学生の活動も支援の対象としている。費用をかけて児童の活動の質を上げることに不慣れた教員も多く、これらの予算獲得とともに、有効な活用方法を助言することも校長の役割となっている。

勝山市は今年度より全国のESDを推進するESD活動センターの地域拠点に登録し各地との連携を図るとともに、各校のESD担当者に対して研修会をもち、活動の意義や指導のポイントなどを説明している。研修会を通して担当者がもち帰った活動の意欲を具現化できるかどうか、校長の助言によるところが大きい。

3 各校の実践

(1) 伝統文化や地域の歴史を素材とした活動

A校においては300年以上の伝統を誇る勝山左義長を学び、児童がお囃子奏者の体験をできるように校内での模擬的な祭りを平成19年より実施している。地域住民の協力を得て各学年が短冊や絵あんどん、作り物などを用意し、会場を華やかに彩って本番の様子を再現している。

B校には地域のシンボルとなる縄文遺跡があ



り、この遺跡の魅力をアピールしようと「原始運動会」を継続的に開催している。児童が毎年のテーマや縄文人の暮らしをイメージした種目や踊りを決め、地域住民らと一緒に、はだしで大会に参加している。

(2) ジオパークを活用した活動

C校では、校区にある湿原の保全活動や調査活動を県自然保護センターや地域と連携し、平成23年から継続的に取り組んでいる。昨年は活動の幅をさらに広げるため、海洋プラスチックごみ問題でプラスチック製ストローの使用を控える動きが広まることともからめ、湿原に生息しているヨシから、ヨシストローを製作した。これを地元の業者に使ってもらったり、修学旅行先で紹介したりし、地域をPRするとともに、環境問題について啓発活動を行った。



D校では、勝山市において恐竜化石が数多く発掘され、県立恐竜博物館が立地することにちなんで、平成28年から「恐竜ひょうたん」の栽培から作品づくりに地域とともに取り組んでいる。児童はひょうたんを乾燥させた後、恐竜をイメージした飾り物に加工し、翌年2月に行われる町の雪まつりで展示し、地域の魅力の一つとして特産化を進めている。

(3) 環境保全をテーマにした活動

E校では市天然記念物に指定されているミチノクフクジュソウの保護活動に平成20年から継続的に取り組んでいる。環境保全に取り組むNPOと連携し、除草作業の他、看板作成や観察に取り組み、県内唯一の自生地をPRするとともに、環境保全意識の啓発を行っている。

F校では校区内を流れる河川に、県の準絶

滅危惧種に指定されている梅花藻が自生している。しかし、近年、ゴミやオオカナダモ（外来種）などにより自生が危ぶまれてきた。そこで、地域の方々と協力して川の清掃活動を通して環境保全に取り組むとともに、発表会で地域の環境について提案を行った。

(4) 地場産業の復活に向けた教育活動

G校では、勝山市で古くから盛んに行われた養蚕の歴史を学ぼうと、学校で養蚕活動に取り組んだ。市の関連団体の指導を受け、桑の葉の採取から餌やりまで毎日世話を続け、夏には繭から糸を取り出す作業に挑戦した。

H校では、町が、まちおこしの一環として取り組んでいるエゴマの商品化に参画している。地域のNPOの協力を得て、エゴマの加工品づくりのうち、昔ながらの農具を使ってエゴマの実を選別する作業や、エゴマ油を市内の市場で販売する体験を行っている。

I校では戦前に地域で盛んだった炭焼きの復活に児童が参画している。地域の協議会の指導の下、原木の窯入れや窯出し作業などの炭焼き作業の他、森林資源の保全のため苗木の植樹や、児童や教師のアイデアを生かした炭の加工品づくりにも盛んに取り組んでいる。



III まとめ

1 研究の成果と課題

今回の発表にあたり、全員の校長に、持続発展教育（ESD）を市内共通の課題として学校経営ビジョンに掲げ、地域と連携し独自の実践を進めたことは、創意と活力ある学校経営に結びついたかを尋ねたところ、全員が「結びついた」と回答した。

最も大きな理由は、郷土に対する誇りや愛着の感情が児童に醸成されていることである。市教育委員会が毎年以下のアンケートをとり、児童・生徒の、ふるさとに対する意識の変容を確認しているが、明らかに地域を見る児童の感覚は変化している。ある校長は、「ふるさとに対する誇りや愛着が、家族や自分自身の自尊感情にも結びついている。」と指摘する。

No	質問内容	平成30年度	令和元年度
		市全体	市全体
1	あなたは、あなたの今住んでいる地域が好きですか。	87.8	92.3
2	あなたは、あなたの今住んでいる地域に誇り（ほこ）れるものがあると思いますか。	84.3	89.6
3	あなたは、あなたの今住んでいる地域に役立つようなことをしたいと思いますか。	78.3	82.5
4	あなたは、あなたの参加で、今住んでいる地域をより住みやすいように変えることができますか。	49.6	48.9
5	あなたは、あなたの今住んでいる地域の行事などに、積極的に参加しようと思いますか。	80.7	85.6
6	あなたは、将来もずっと今の地域に住んでいたいと思いますか。	61.0	63.9

令和元年度 勝山市小中学生のふるさとへの意識(勝山市教育委員会)

また、学校が地域とともに進めた活動が、新聞紙面などに紹介されることにより、保護者や地域住民の口から好評価が教員にフィードバックされ教職員の意欲を高めたことも理由の一つである。

さらに、活動を通して教員と地域住民の間に良好な関係ができたことにより、地域の学校として認知を受け、信頼感の向上につながったことを理由にあげる校長もいた。

教職員の創意の面からは、それぞれの地域の学習素材が明確になってきたために、何を工夫すればよいか分かりやすくなっていることが指摘された。新任の教員にとっては、手探りで新しい地域素材を教材化する事は難しいが、前年度までの取組を参考にして、児童とともに工夫を加えることが比較的容易になっている。「年度始めにどのような形で成果をまとめるか（活動のゴール）を明確しておくことや、「成果物の販売活動は児童の活動意欲を高める」ことなど、指導法に関しても市

内で共有されつつある。

この他、勝山市や勝山市教育委員会が予算面や研修面でバックアップしていることも学校に負担をかけずに、児童に達成感を味わわせる成果を生み出す要因にもなっている。

新年度に向けた各校の企画も盛んで、教科横断的な学習を目指して、同じ素材を活用しながらも新しい取組が様々に企画されている。中世の宗教都市として昨年度、日本遺産に登録された平泉寺を校区とする勝山市の小学校では、同じく日本遺産に登録された朝倉氏遺跡を校区とする福井市の小学校との交流授業を企画している。また、里山を校区とする小学校では獣害対策をテーマとして仮説を立て作物を守る方法を試行錯誤しはじめた。さらに、地域の人材に焦点を当て、地域の達人としてその活動を広く紹介したり、校区で生産されるメロンなどの食品に焦点を当て研究や発信したりすることにより、郷土への愛着を深めようとする学校もあり、創意と活気に満ちた活動の幅が広がっている。

反面、地域指導者の高齢化や働き方改革との両立が課題としてあげられた。活動を継続するために、新たな指導者を見つけ出すとともに、限られた時間の中で、地域人材との打合せを行う時間を確保する工夫が必要である。さらに、地域活動には欠くことのできないバス代等の移動費用の確保も課題である。活動がマンネリ化しないよう、活動に新しい工夫を加え、県や市予算が安易の削減されないよう、活動の意義や成果を積極的に発信していかなければならない。

2 おわりに

最近参加したセミナーにおいて「人口減少の中で大事なものは、その地域に特徴的な『小ネタ』が豊富にあること。みんなで小ネタを発掘し、発展につなげてほしい」との提言があった。

児童や教員とともに、楽しみながら「小ネタ」の種をまき続けることにより、地域の存続に貢献するとともに、子どもたちに地域に対する誇りと愛着を育て、未来の地域を担う人材育成に向けた学校運営に取り組んでいきたい。